

鼠径部痛と対側の腰椎分離症を併発した一症例

○梨本 智史 (なしもと さとし)(PT)¹⁾, 渡辺 聡 (MD)²⁾, 角張 勲 (PT)¹⁾, 渡邊 博史 (PT)¹⁾,
飯田 晋 (PT)¹⁾, 佐藤 卓 (MD)²⁾

¹⁾ JA 新潟厚生連 新潟医療センター リハビリテーション科

²⁾ JA 新潟厚生連 新潟医療センター 整形外科

【はじめに】

鼠径部痛と対側の腰椎分離症を併発した症例を経験し、両者の関連性から腰椎分離症発生の危険因子を考察した。

【症 例】

17歳, 男性, サッカー部, 右利き。

【現病歴】

1か月前から左股関節痛を自覚し、その1週後に腰痛を感じはじめた。痛みの範囲で練習していたが、緩解なく当院受診となった。

【初期評価】

CT画像で長内筋筋付着部の剥離骨折とL5右椎間関節に腰椎分離症を確認した。体幹自動伸展は腰部の痛みではば行えず、臀踵間距離(HBD)右5横指, 左7横指, SLR左右ともに45度であった。右下肢自動SLRや股関節内転時に右股関節痛があった。

【介 入】

軟性コルセットを処方し、初期は股関節周囲筋のストレッチと胸椎伸展運動、腹横筋の促通を行った。痛みの軽減に合わせて、股関節を内転させての腹筋運動や立位での股関節内外転運動を加えた。体幹伸展の可動域は徐々に広がったが、最終域で右回旋が伴い、左大腿前面筋に対するストレッチ等は、入念に実施した。

【最終評価】

4か月で体幹伸展や左股関節内転に伴う痛みは軽減し、HBD右0横指左1横指, SLR左右ともに70度となった。CTで骨癒合を確認し、競技復帰となった。競技復帰から5か月経過し、再発はない。

【考 察】

腰椎分離症と胸椎や股関節周囲筋の柔軟性低下の関連報告は多いが、対側下肢の影響は報告が少ない。本症例は、左股関節剥離骨折に伴う前面の柔軟性低下が体幹伸展時の右回旋につながり、腰部へのメカニカルストレスの増加、腰椎分離症発生につながったと考えられた。腰椎分離症の再発予防の見地から、対側股関節の柔軟性の確保も重要と考えられた。